

初年次教育科目「ベーシック」の開発と運用

Curriculum planning and implementation of first-year subject "BASIC"

本間里見 根本淳子

Riken HOMMA, Junko NEMOTO

熊本大学

Kumamoto University

＜あらまし＞ 本稿では、2011 年度からスタートした熊本大学の新カリキュラムにおいて新設した初年次教育科目「ベーシック」について、その概要と一年目の実施状況を報告する。ベーシックは熊本大学の学生として共通して身につけるべき、基礎的な知識と学習スキルを習得する科目であり、一年生 1800 名を対象とした一単位の必修科目である。本稿では、ベーシックを受講した学生に実施した授業開始前と終了後の学習効果の自己評価の結果から、本科目の成果と課題を明らかにする。

＜キーワード＞ 初年次教育, e ラーニング, 学習到達度, 教材開発, 学習コンテンツ

1. はじめに

熊本大学では、これから大学で学びはじめる新入生が大学という新しい教育・学習環境に適応するために必要とされる最低限の知識やスキルを獲得することを意図した初年次教育に取り組んできた。特に教養教育では、情報リテラシー教育と共に大学での学び方の姿勢や方法、すなわち、学習リテラシーの教育についても検討を重ねてきた。一方、アメリカの大学に見られる¹⁾ように、薬物や飲酒などの問題や環境や安全の問題など、大学生の生活全体を包括する初年次教育プログラム (FYE) の検討もはじめた。このような背景のもと、新カリキュラムでは、学習リテラシーに加え健康・安全・環境の基礎理解、キャリア教育を含む初年次科目として、新たに「ベーシック」が開発された。ベーシックでは、約1800名の新入生を対象とするため、講義の予習・復習、課題の提出、小テスト、アンケート、発展学習等をeラーニングで学習できる環境を構築し、対面講義をフォローするブレンド型講義を実施している。本稿では、ベーシックの概要と一年目の運用実績について報告する。

2. ベーシックの概要

ベーシックは、全学部の初年次 (1 年生) 対象の科目であり、1800 名 (2011 年度) の受講者を12 クラス (1 クラス当たり平均 150 名) に分け、講義している。複数の教員及び職員によるオムニバス形式で、8 回講義による 1 単位の必修科目 (教育学部と理学部を除く) である。1 年次前学期を

前半と後半に分け、コミュニケーション能力の育成を目的とした少人数ゼミである基礎セミナーと組み合わせたクラス編制とした。新入生は、1 年次の前学期にベーシック 1 単位と基礎セミナー1 単位の両方を受講することになる。

2.1 授業の目的

ベーシックは、熊本大学の学生として共通して身につけるべき、基本的な大学に対する考え方・学習方法・大学生活において求められる知識を習得することを目的としている。学士課程教育の体系の中では、「熊本大学学士課程教育に期待される学習成果」に基づき、特に「汎用的な知力」を育成する科目として位置づけられている。

2.2 授業の内容

授業の内容として、「自己を学ぶ」「学習を学ぶ」「社会を学ぶ」の 3 つの「学び」を学習するために以下の 7 単元で構成している。

- ① 熊大 A to Z (熊本大学の概要、科目概要)
- ② 図書館活用法
- ③ 環境報告書を読んで行動する技術
- ④ 生活のまわりのリスク
- ⑤ 大学における薬物乱用および飲酒の問題
- ⑥ レポート作成の基本 (2 回)
- ⑦ 一年次生のためのキャリアガイダンス

このうち⑥のレポート作成は、2 コマ連続で講義が実施され、合計 8 コマで構成される。各単元の授業では、毎回、課題や小テストを出題し Web 上で提出させた。成績判定は、可否の二段階方式である。受講者の授業の参加状況、課題提出状況及び学習効果のセルフチェック等の判定資料を作成し、ベーシック分科会 (担当者会議) で一括

して単位認定を行う。

2.3 LMSの活用

授業は、対面形式の授業だけでなく、eラーニングによる学習も含まれるブレンド型講義である。②図書館活用法、③環境報告書を読んで行動する技術、④生活のまわりのリスク、の3回はPC教室で行われ、講師のレクチャーの他にeラーニング教材による演習が行われる。LMSとしてBlackboardを利用し、教材を開発した。

3. 学習効果のセルフチェック

受講生自身が、学習効果を自己確認するために授業開始前と授業終了後に学習効果のセルフチェックを行った。セルフチェックの内容は、各単元の達成目標を設問とし、自由記述を含む15項目(5件法)を設定した。回収できたデータのうち自己評価結果の学習・後の結果が揃ったものは1381件であった。授業実施前の自己評価結果平均値は3.1($SD=0.1$)であったのに対し、終了後は4.4($SD=0.7$)に向上した。項目ごとにt検定を行ったところ、すべての項目において1%水準で有意差がみられた(表1)。本

表1. 講義内容に対応した自己評価結果

分野	質問(5件法)	事前 (SD)	事後 (SD)
熊大 AtoZ	質問1. 友人や家族に「熊大の特徴はどんなところ?」と聞かれた際、熊大の歴史、教育システム、先端研究、社会貢献のいずれか一つを取り上げ、具体的な説明できると思う	2.6 (1.0)	4.3 (0.6)
	質問2. 熊本大学の一員であるという意識がある	3.9 (0.8)	4.6 (0.6)
キャリア 教育	質問3. 高校生の時と大学生になってからの生活面と学習面で何が違うかを両方とも友人や家族に説明することができる	4.0 (0.8)	4.6 (0.6)
	質問4. 将来のキャリアを意識しながら、大学で学ぶ中で「特に頑張りたい、〇〇ができるようになりたい」という目標がある	4.0 (0.9)	4.5 (0.7)
レポート 作成	質問5. 大学の授業でレポートを書く課題が出たときに、文章の構成や参考文献の引用の仕方などの基本が何かを友人に説明できると思う	2.4 (1.1)	4.2 (0.7)
	質問6. 大学の授業でレポートを書く課題が出たときに、文章の構成や参考文献の引用の仕方などの基本を踏まえて書くことができると思う	2.5 (1.1)	4.2 (0.7)
図書館 活用	質問7. 授業で出された課題(レポートなど)に取り組む際に課題に関係する情報を、図書館サービスを使おうと思う	4.0 (0.9)	4.6 (0.7)
	質問8. 授業で出された課題(レポートなど)に取り組む際、課題に関係する情報を図書館サービスを利用して一人で自由に検索できると思う	3.3 (1.0)	4.5 (0.7)
環境教育	質問9. 熊本大学で取り組んでいる環境にやさしい活動にはどのようなものがあるか、具体例を二つ以上挙げて説明できる	2.1 (1.1)	4.1 (0.8)
	質問10. 熊本大学で取り組んでいる環境にやさしい活動を意識して、環境に配慮した行動を取れると思う(例:エアコン温度の調整・ボランティア活動への参加・リサイクル活動)	3.4 (1.0)	4.4 (0.7)
安全教育	質問11. ゼミ活動・ボランティア活動・クラブ活動・一人暮らしなど、大学生活の中で多くの人と活動する上で起こりそうな安全に関する災害はどのようなものがあるか具体的に二つ以上説明できる	3.5 (1.0)	4.4 (0.7)
	質問12. 質問11で挙げた「災害」すべてに対して、発生を防ぐための対策をひとつずつ以上述べることができる	3.1 (1.0)	4.3 (0.8)
健康教育	質問13. アルコール・喫煙・薬物依存に関する問題の中で、自分が大学生活の中で注意すべき問題を二つ以上取り上げて説明することができる	4.0 (0.8)	4.6 (0.6)
	質問14. 質問13で挙げた「自分が注意すべき問題」すべてに対する対処法をひとつずつ以上説明することができる	3.7 (1.0)	4.5 (0.7)

科目での学習を通じ習得してほしいスキルや知識が向上したと自己評価できていることが確認できた。特に、レポートの作成に関する質問5と質問6の平均値が大きく向上し、学習スキル向上の支援が実現できたことが示唆された。

4. まとめ

汎用的な知力の育成を目指し開発した「ベーシック」について、学習前後に実施した自己評価により、本科目の目標を一定程度達成できたことを確認できた。一方で、他の初年次科目との内容の重複や、講義スケジュールの不整合等がみられる。今後は、初年次科目群を総合的に捉え、カリキュラム上の連携を促進する必要があると考える。

なお、本報告は、文部科学省平成21~23年度大学教育推進プログラムの実施報告書^[2]のうち、ベーシックの部分を報告したものである。

参考文献

- [1] 濱名篤, 初年次教育の日本的課題—拡大するFYEの解釈(上), アルカディア学報 2140号, 日本私立大学協会, 2004
- [2] 文部科学省平成21~23年度大学教育推進プログラム「学習成果に基づく学士課程教育の体系的構築」実施報告書, 国立大学法人熊本大学, 2012